

中島
敦



山
月

記

山
月
記

隴西ろうせいの李徴りちようは博学才穎さいえい、天宝の末年、若くして名を虎榜こぼうに連ね、ついで江南尉こうなんいに補せられたが、性、狷介けんかい、自ら恃たのむところすこぶる厚く、賤吏せんりに甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略かくりやくに歸臥きがし、人と交まじわりを絶つて、ひたすら詩作に耽ふけつた。下吏かりとなつて長く膝ひざを俗悪な大官の前に屈くつするよりは、詩家としての名を死後百年に遺のこそうとしたのである。しかし、文名は容易あがに揚あがらず、生活は日を逐おうて苦しくなる。李

徴はようやく焦躁しょうそうに駆かられて来た。この頃ころからその容貌ようぼうも峭刻しょうこくとなり、肉落ち骨秀ひいで、眼光ひんぎようのみ徒いたずらに炯々けいけいとして、かつて進士に登第した頃の豊頬ほうきようの美少年の倂おもかげは、何処に求めようもない。数年の後、貧窮ひんきゆうに堪たえず、妻子の衣食のために遂ついに節を屈して、再び東へ赴おもむき、一地方官吏の職を奉ほうずることになった。一方、これは、己おのれの詩業なかに半ば絶望したためでもある。かつての同輩どうはいは既すでに遥はるか高位に進み、彼かれが昔むかし、鈍物どんぶつとして齒牙しがにもかけなかつたその連中かめいの下命かめいを拝さねばならぬことが、往年しゆんさいの儁才しゆんさい李徴の自尊心をいかに傷きずけたかは、想像に

難くない。彼は怏々おうおうとして楽しまず、狂悖きょうはいの性はいよ
 いよ抑え難おさくなつた。一年の後、公用で旅に出、汝水じよすいの
 ほとりに宿つた時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔
 色を変えて寢床ねどこから起上ると、何か訳わかの分らぬことを叫
 びつつそのまま下にとび下りて、闇やみの中へ駈出かけだした。彼
 は二度と戻もどつて来なかつた。附近ふきんの山野を搜索そうさくしても、
 なんの手掛てがりもない。その後李徴がどうなつたかを知る
 者は、誰だれもなかつた。

翌年、監察御史かんさつぎよし、陳郡ちんぐんの袁愔えんさんという者、勅命ちよくめいを奉じ
 て嶺南れいなんに使し、途に商於しょうおの地に宿つた。次の朝まだ暗い中うち

に出発しようとしたところ、駅吏が言うことに、これから先の道に人喰虎ひとくいどらが出る故ゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜よろしうでしよう。袁倬は、しかし、供廻ともまわりの多勢なのを恃み、駅吏の言葉を斥しりぞけて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時、果して一匹ぴきの猛虎もうこうが叢くさむらの中から躍おどり出た。虎は、あわや袁倬に躍りかかるかと見えたが、たちまち身を翻ひるがえして、元の叢に隠かくれた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった」と繰返くりかえしつぶや呻うなくのが聞えた。その声に袁倬は聞き憶おぼえがあった。

驚懼きょうくの中にも、彼はとっさに思いあたって、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁儻は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かった李徴にとって、最も親しい友であった。温和な袁儻の性格が、峻峭しゅんしょうな李徴の性情と衝突しょうとつしなかつたためであろう。

叢の中からは、しばらく返辞が無かった。しのび泣きかと思われる微かすかな声が時々洩もれるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「如何にも自分は隴西の李徴である」と。

袁儻は恐怖きょうふを忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐なつかし

げに久闊きゆうかつを叙じよした。そして、なぜ叢から出て来ないのかと問うた。李徴の聲が答えて言う。自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめと故人ともの前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖いふ嫌厭けんえんの情を起させるに決っているからだ。しかし、今、凶らずも故人あに遇うことを得て、愧赧きたんの念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜しゆうあく悪あくな今の外形いとを厭いとわず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交してくれないだろうか。

後あとで考えれば不思議だったが、その時、袁傜は、この
 超ちようしぜん自然の怪異かいいを、実に素直うけいに受容れて、少しも怪あやしもう
 としなかった。彼は部下に命じて行列の進行を停とめ、自
 分は叢の傍に立って、見えざる声と対談した。都の噂うわさ、
 旧友の消息、袁傜が現在の地位、それに対する李徴の祝
 辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔へだてのない語
 調で、それらが語られた後、袁傜は、李徴がどうして今
 の身となるに至ったかを訊たずねた。草中の声は次のように
 語った。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊とま

った夜のこと、一睡いっすいしてから、ふと眼めを覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中むがむちゆうで駈けて行く中に、いつしか途みちは山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫つかんで走っていた。何か身体中からだに力が充みち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳とび越こえて行った。気が付くと、手先や肱ひじのあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨のぞんで姿を映して見ると、既に虎となつていた。自分は初め眼を信じなかつた。次

に、これは夢ゆめに違ちがいないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあつたから。どうしても夢でないと悟さとらねばならなかつた時、自分は茫然ぼうぜんとした。そうして懼おそれた。全く、どんな事でも起り得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、なぜこんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判わからぬ。理由も分らずに押付おしつけられたものをおとな大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分はすぐに死を想おもうた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎うさぎが駈け過ぎるのを見た途端とたん

に、自分の中の人間はたちまち姿を消した。再び自分の
 中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、
 あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての
 最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行を
 し続けて来たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一
 日の中に必ず数時間は、人間の心が還つて来る。そうい
 う時には、かつての日と同じく、人語も操れば、複雑
 な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることも出
 来る。その人間の心で、虎としての己の残虐な行のあ
 とを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐

しく、いきどお憤ろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなつて行く。今までは、どうして虎などになつたかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が付いて見たら、おれはどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経たてば、おれの中の人間の心は、けもの獣としての習慣の中にすつかり埋うもれて消えてしまふだろう。ちようど、古いきゆうでん宮殿の礎いしずえが次第に土砂に埋没まいぼつするように。そうすれば、しまいにおれは自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂くるい廻まわり、今日のように途で君と出会つても故と人と

認めることなく、君を裂き喰うて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思い込んでいるのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。おれの中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、その方が、おれはしあわせになれるだろう。だのに、おれの中の間人は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！ おれが人間だった記憶のなくなるこ

とを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。おれと同じ身の上に成った者でなければ。ところで、そうだ。おれがすっかり人間でなくなってしまう前に、一つ頼たのんでおきたいことがある。

袁儻はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞入っていた。声は続けて言う。

他でもない。自分は元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業いまだ成らざるに、この運命に立至った。かつて作るところの詩数百篇ぺん、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿いごうの所在もはや判らなくなっている

よう。ところで、その中、今もなお記誦きしゅうせるものが数十ある。これを我がために伝録して戴いたきたいのだ。何も、これによって一人前の詩人面づらをしたいのではない。作の巧拙こうせつは知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生しょう涯がいそれに執しゅうちやくやく着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死に切れないのだ。

袁傔は部下に命じ、筆を執とって叢中の声にしたがつて書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響ひびいた。長短およそ三十篇、格調高雅こうが、意趣卓逸いしゆたくいつ、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁傔は

感嘆かんたんしながらも漠然ばくぜんと次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙びみょうな点において）欠けるところがあるのではないかと。

旧詩を吐き終はった李徴の声は、突然とつぜん調子を変え、自らを嘲あざけるかごとくに言った。

羞はずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、おれは、おれの詩集が長安風流人士の机の上に置かれている様を、夢に見ることがあるのだ。

岩窟がんくつの中に横たわって見る夢にだよ。嗤わらってくれ。詩人に成りそこなつて虎になつた哀あわれな男を。(袁儉は昔の青年李徴の自嘲癖じちようへきを思出しながら、哀しく聞いていた。) そうだ。お笑い草ついでに、今の懐おもいを即席そくせきの詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているいるいに。

袁儉はまた下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 當時声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘輶氣勢豪

此夕溪山对明月 不成長嘯但成嗥

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋しげく、樹間を渡わたる冷風は既にあかつき暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、肅然しゆくぜんとして、この詩人の薄倖はっこうを嘆たんじた。李徴の声は再び続ける。

なぜこんな運命になったか判らぬと、さつきは言ったが、しかし、考えようによれば、思い当ることが全然な

いでもない。人間であつた時、おれは努めて人との交を避さけた。人々はおれを倨傲きよごうだ、尊大だといった。実は、それがほとんど羞恥心しゆうちしんに近いものであることを、人々は知らなかつた。もちろん、かつての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かつたとは云いわれない。しかし、それは臆病おくびような自尊心とでもいうべきものであつた。おれは詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨せつさたくまに努めたりすることをしなかつた。かといつて、また、おれは俗物の間に伍ごすることゝも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、

尊大な羞恥心とのせいである。己おのれの珠たまに非あらざることを惧おそ
 れるが故に、あえて刻苦こつくして磨みがこうともせず、また、己
 の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々ろくろくとして瓦かわらに伍
 することも出来なかつた。おれは次第に世と離れ、人と
 遠とほざかり、憤悶ふんもんと慙恚ざんいによつてますます己の内なる臆
 病な自尊心を飼かいふとらせる結果になつた。人間は誰で
 も猛獸もうじゆうつかい使つかであり、その猛獸に当るのが、各人の性情だ
 という。おれの場合、この尊大な羞恥心が猛獸もうじゆうつかいだつた。
 虎だつたのだ。これがおれを損い、妻子を苦しめ、友人
 を傷つけ、果ては、おれの外形をかくのごとく、内心に

ふさわしいものに変えて了つたのだ。今思えば、全く、おれは、おれの有^もつていた僅^{わず}かばかりの才能を空費してしまつた訳だ。人生は何事をもなさぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄^{ろう}しながら、事實は、才能の不足を暴露^{ばくろ}するかも知れないとの卑怯^{ひきよう}な危惧^{きぐ}と、刻苦を厭^{いと}う怠惰^{たいだ}とがおれのすべてだつたのだ。おれよりも遙かに乏^{とぼ}しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾^{いく}らでもいるのだ。虎と成り果てた今、おれはようやくそれに気が付いた。それを思うと、おれは今も胸を灼^や

かれるような悔を感じる。おれにはもはや人間としての生活は出来ない。たとえば、今、おれが頭の中で、どんな優れた詩を作ったにした所で、どういう手段で発表できるように。まして、おれの頭は日ごとに虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。おれの空費された過去は？ おれは堪^{たま}らなくなる。そういう時、おれは、向うの山の頂の巖に上り、空谷^{くうこく}に向って吼^ほえる。この胸を灼く悲しみを誰かに訴^{うった}えたいのだ。おれは昨夕も、かしこで月に向って咆^ほえた。誰かにこの苦しみが分ってもらえないかと。しかし、獣どもはおれの声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏^ふ

すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮
っているとしたか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、
誰一人おれの気持を分ってくれる者はない。ちようど、
人間だった頃、おれの傷つき易い内心を誰も理解してく
れなかったように。おれの毛皮の濡れたのは、夜露のた
めばかりではない。

ようやく四辺あたりの暗さが薄うすらいで来た。木の間を伝って、
どこからか、暁角ぎようかくが哀しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ。酔よわねばならぬ時が、
(虎に還らねばならぬ時が) 近づいたから、と、李徴の

声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。
 それは我が妻子のことだ。彼等らはまだ虢略かくりやくにいる。も
 とより、おれの運命については知るはずがない。君が南
 から帰ったら、おれは既に死んだと彼等に告げてもらえ
 ないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲
 しい。厚かましい願ねがいが、彼等の孤弱こじやくを憐あわれんで、今
 後とも道塗どうとに飢凍きとうすることのないように計らって戴ける
 ならば、自分にとって、恩倖おんこう、これに過ぎたるは莫ない。
 言終ことわりって、叢中そうちゆうから慟哭どうこくの聲が聞えた。袁もまた涙なみだ
 を泛うかべ、欣よろこんで李徵の意いに副そいたたいむねを答えた。李

徴の声はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻つて、言った。

本当は、まず、この事の方を先にお問い合わせすべきだったのだ、おれが人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮すのだ。

そうして、附加つけくわえて言うことに、袁慘が嶺南からの帰途には決してこの途を通らないで欲しい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲おそいかかるかも知れないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘おか

に上ったら、こちらを振りかえって見てもらいたい。自分は今この姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為である。

袁儻は叢に向って、懇ろねんごに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪え得ざるがごとき悲泣の声が洩れた。袁儻も幾度か叢を振返りながら、涙の中に出発した。

一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振

返って、先ほどの林間の草地を眺めた。^{なが}たちまち、一匹の虎が草の茂み^{しげ}から道の上に躍り出たのを彼等を見た。虎は、既に白く光を失った月を仰^{あお}いで、二声三声咆哮^{ほうこう}したかと思うと、また、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

(昭和十七年二月)

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行

日本文学電子図書館